令和７年度「広島広域都市圏地域貢献人材育成支援事業」

「次世代メディアアーティストによるナイトタイムコンテンツ創出事業
― 国宝不動院プロジェクションマッピング ～光でつなぐ歴史とみらい～ ―」

１．事業の背景および目的

本事業は、広島市東区に所在する国宝不動院金堂を舞台に、大学教育と地域資源を結び付けた新たな夜間文化コンテンツを創出することを目的として実施したものである。近年、地域における文化資源の活用や夜間観光の充実は、地域活性化や都市の魅力向上において重要な課題となっている。一方で、文化財建築は保存・保護の観点から活用に制約が多く、若い世代が主体的に関わる機会は限られてきた。本事業では、大学生を中心とした次世代人材が、文化財の価値を学びつつ、最新の映像・音楽表現を通して地域に開かれた形で再解釈・発信することを目指した。あわせて、異なる大学・学部・分野の学生が協働する教育的枠組みを構築し、地域課題に向き合いながら実践的に学ぶ「地域貢献型人材育成」のモデル形成を目的とした。

２．事業実施体制と連携の特徴

本事業は、比治山大学・比治山大学短期大学部およびエリザベト音楽大学を中心に、広島市（市民局文化振興課、東区役所）、真言宗別格本山安国寺不動院、地域自治会、教育機関、文化団体等と連携して実施した。

大学間連携においては、比治山大学・短期大学部の学生が映像制作・企画・記録・運営を担い、エリザベト音楽大学の学生が音楽制作を担当する形で役割分担を行った。さらに、高校・中学校・幼稚園とのワークショップ連携により、制作プロセスそのものを地域へ開く構造とした点が本事業

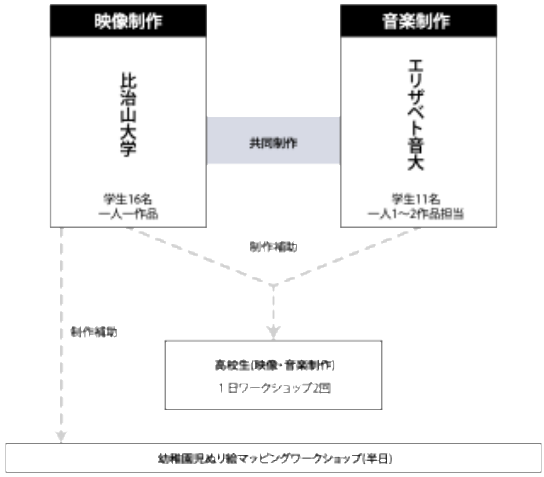

図１　協働の図

また、文化財である国宝建築を扱うにあたり、寺院および行政と密に協議を行い、安全性、光量、音量、観客動線等に十分配慮した運営体制を構築した。

表１　概要図

項目	内容
上映日	2025 年 11 月 1 日・2 日
会場	国宝 不動院金堂（広島市東区）
作品数	16 作品
映像	比治山大学短期大学部美術科映像・アニメーションコース 2 年生 16 名
音楽	エリザベト音楽大学 音楽文化専修創作プログラム作曲〉7 名　修士課程音楽学専攻音楽創作〈作曲〉　3 名 卒業生　1 名
高校生参加	比治山女子高校 4 名 広島市立基町高校 15 名
園児参加	比治山大学短期大学部付属幼稚園 132 名 地域の子ども達 9 名
上映時間	合計約 31 分 (大学生)1 作品 30～50 秒／総尺約 12 分 (高校生) 1 作品約 10 秒／総尺約 5 分 (園児)1 枚 5 秒／総 14 尺 年少・満 3 歳　計 5 分,　年中　計 4 分,　年長・地域の子ども達　計 5 分,
観客数	約 2,100 名（当初想定 600 名）
技術協力	合同会社 WHITE BASE(テンプレート制作および演出指導・映像送出)
機材協力	株式会社コネクトライン（プロジェクター・音響）

３．活動内容および実施プロセス

（１）事前調査・基礎学習（2025 年 4 月～6 月）

事業開始後、まず学生を対象に国宝不動院の歴史、建築的特徴、文化的価値に関する基礎学習を行った。あわせて、現地見学を通じて、空間構成や周辺環境、夜間の視認条件等を調査した。この段階では、「文化財を用いた表現とは何か」を学生自身が考えることを重視し、単なる映像投影ではなく、文化財との対話としての表現を目指す姿勢を育成した。

図 2 現地調査の様子

（２）技術検証・ワークショップ（7 月～8 月）

7 月から 8 月にかけて、LiDAR を用いた 3D 計測、金堂の建築模型の 3D プリント試作を行い、投影面の形状理解と歪み補正の検証を進めた。これにより、実際の建築形状を踏まえた映像設計が可能となった。

図 3 高校生に教える大学生

同時期に、広島市立基町高等学校、比治山女子中学・高等学校、比治山大学短期大学部付属幼稚園においてワークショップを実施した。参加者は、光・映像・音に触れながら、文化財や地域について考える体験を行い、学生にとっては「教える」「伝える」立場で地域と関わる貴重な機会となった。

（3）制作・試写・本番上映（9 月～11 月）

9 月以降は、映像制作担当学生 16 名と音楽制作担当学生 12 名がペアを組み、各作品の制作を本格化させた。3DCG、手描きアニメーション、実写素材など多様な手法を用い、金堂の建築構造を生かした表現を試みた。10 月には計 3 回の現地試写を実施し、歪み補正、色調、輝度、視認性の改善を重ねた。11 月 1 日・2 日の本番上映では、延べ約 2,100 名が来場し、地域住民、観光客、教育関係者など多様な層が参加した。

図 4, 5, 6, 7, 当日の様子

４．教育的成果

本事業に参加した学生は、企画立案から調査、制作、検証、公開までを一貫して経験することで、教室内では得がたい実践的な学修成果を得た。

特に、文化財という制約条件の多い対象に向き合う中で、技術力だけでなく、公共性、倫理性、協働性を踏まえた表現力が養われた。また、分野の異なる学生同士が協働することで、専門性を相互に理解し、調整しながら制作を進める能力が向上した。

さらに、ワークショップや報告会を通じて、自身の制作を言語化し、地域へ説明する経験は、学生の主体性と社会的視野を広げる教育効果をもたらした。

図８　協働を通じて絆が深まった仲間たちとの写真

５．地域への波及効果

地域においては、国宝不動院を夜間に開く新たな文化体験の場を創出し、地域のにぎわい創出に寄与した。来場者からは「文化財を身近に感じられた」「若い世代の表現に触れられてよかった」「またやってほしい」といった声が多く寄せられた。

また、自治会、学校、文化団体、行政が連携する事業モデルとして、地域内外から高い評価を得た。本事業をきっかけに、今後の継続開催や他地域への展開を検討する動きも生まれている。

６．数値による成果

- 参加学生数：47 名
- 本番来場者数：延べ約 2,100 名
- ワークショップ参加者：約 120 名
- 報告会・展示来場者：約 450 名

７．課題と今後の展望

制作・運営における学生の負担が大きかった点や、継続開催に向けた安定的な運営体制の構築が課題として挙げられる。今後は、制作期間の分散化や開催時期の固定化、補助スタッフの導入、企業・団体との協働強化が必要である。